令和５年度

奈良教育大学ＥＳＤ学生活動報告書

2024年3月

奈良教育大学　ESD・SDGsセンター

は じ め に

奈良教育大学ＥＳＤ・ＳＤＧｓセンター長　中澤　静男

２月に引っ越しをしました。それを機に断捨離をしようと、いつから家にあるのかわからないような荷物を片付けました。１９５７年にソビエトが打ち上げた人工衛星スプートニク１号の貯金箱や１９７０年の大阪万博の記念品、そういえば、大阪万博の電気通信館で初めて携帯電話で自宅に電話したことなど思い出していたら、なかなか荷物が片付きません。特に大学時代の写真を見ていると、友達との楽しかった下宿での時間、苦しかった練習、いつも空腹だった日々、極めつけは大学時代のガクラン（学生服）が出てきたので、着てみました。そしてその写真を大学の友人たちでつくっているラインに投稿したところ、ものすごい反響で、同窓会やろうと進んでいます。

みなさんにとって、この報告書に記載された活動記録は、大学時代を呼び起こしてくれるトリガーになるはずです。

ウェルビーイング研究者である前野隆司氏によると、ウェルビーイングとは、「身体的・精神的・社会的に良好な状態」のことを指す言葉で、ウェルビーイングをもたらす４つの「幸せ因子」に整理しています。

１つ目が「やってみよう」因子（自己実現と成長）で、夢や目標に向かって努力したり成長したりすると幸福度が増すというものです。逆に「やらされ感」では同じことをしていても疲れるばかりです。

２つ目が「ありがとう」因子（つながりと感謝）です。周囲にいる人々とのつながりを大切にする人、感謝の気持ちを持っている人、CARE できる人は幸せです。

３つ目は「なんとかなる」因子（前向きと楽観）です。どんなことも楽観的に捉え、常にチャレンジ精神で取り組んでいる人は幸せです。

４つ目が「ありのままに」因子（独立と自分らしさ）です。他の人と比較することなく、自分らしく生きている人は幸福度が高いという傾向があります。

みなさんの学生生活はこれらに該当しているのではないでしょうか。というのも、ウェルビーイングをもたらすものは「利他」的行動であると言われているからです。

本報告書には、授業以外で積極的にＥＳＤについて学んだＥＳＤ演習と、学んだことを基盤に学校現場や公民館等で児童生徒に関わったＥＳＤ実践が掲載されています。やらされているのではなく、自ら学びに取り組んだＥＳＤ演習は、「やってみよう」因子に関連しています。ＥＳＤ実践はどうしていいかわからない、多様な子どもへの対応に正解はないにもかかわらず、友達と一緒なら「なんとかなる」とやってみた記録であり、利他そのものです。子どもたちの記憶にはみなさんとかかわった楽しい思いでいつまでも思い起こされ、次のＥＳＤの担い手を育てることになったかもしれません。

本報告書は国語教育専修２回生吉岡さん、英語教育専修２回生の澤井さん、同じく英語教育専修１回生の田中さんの３名が編集委員に立候補してくれて、できあがったものです。

ありがとうございました。

目　次

はじめに…… 1
目次…… 2

奈良市立西大寺北小学校野外活動支援…… 3
奈良市立三碓小学校野外活動支援…… 4
奈良市立富雄南小学校野外活動支援…… 5
奈良市立安堵小学校野外活動支援…… 6
奈良市立平城小学校野外活動支援…… 7
奈良市立飛鳥中学校 創立40周年記念事業におけるキャンプファイヤー補助…… 8
あすかバンド野外活動支援…… 9
仰木の里小学校　修学旅行支援…… 10

第1回春日山原始林・奈良公園フィールドワーク…… 11
第2回春日山原始林・奈良公園フィールドワーク…… 12
第3回春日山原始林・奈良公園フィールドワーク…… 13
第4回春日山原始林・奈良公園フィールドワーク…… 14
第8回春日山原始林・奈良公園フィールドワーク…… 15
くらしのブンカサイinいこま…… 16
あつまれECOキッズ！！…… 17
第1回森と水の源流館授業づくりセミナー…… 20
第2回森と水の源流館授業づくりセミナー…… 21
第3回森と水の源流館授業づくりセミナー…… 22
第4回森と水の源流館授業づくりセミナー…… 23
第5回森と水の源流館授業づくりセミナー…… 24
第1回奈良ESD連続セミナー…… 25
第2回奈良ESD連続セミナー…… 26
第3回奈良ESD連続セミナー…… 27
第4回奈良ESD連続セミナー…… 28
第7回奈良ESD連続セミナー…… 29
第8回奈良ESD連続セミナー…… 31
第9回奈良ESD連続セミナー…… 33
第10回奈良ESD連続セミナー …… 34
奈良女子高校フィールドワーク…… 36
近畿ESDコンソーシアム…… 37
国際シンポジウム　ユネスコクラブ発表資料…… 38

編集後記…… 49

奈良市立西大寺北小学校野外活動支援

◆概要

・児童の前で簡単な自己紹介

・飯盒炊飯の援助

（お米の水の量の確認、カットした具材の大きさの確認、安全確認、片付け等の指示や手伝い、掃除など）

・集合の声掛け

・キャンプファイヤー

・みんなの広場と Go バナナの２つのスタンツ

・スタンツ中、周りの児童に声掛けや体調を崩している子がいないかの確認など

（特別支援教育専修１回生　長尾希颯）

◆ 自分で考えたこと

カレー作りではかまどの火の取り扱い、包丁の取り扱い、狭い場所での移動のしかたなどたくさんのことに気を付けないといけないとわかった。いろいろな班に指導をしようと思ったが、移動が大変だったため担当班などを決めておいた方が良かったのかもしれない。カレーをうまく作れなかった班もあってたくさん残ってしまっていたが、みんなで作ったという経験が子どもにとって良いものになるのではないかと考えた。

（教育学専修２回生　宮木舞）

今回の野外活動支援で初めてキャンプファイヤーを行い、あれほどまでに暗くなってしまうのかと驚いた。私は暗闇かつ前日の雨の影響で草が濡れており、足をひねってしまい最後まで輪の中で参加することはできなかった。輪の中には入れなかったが声出しなどで積極的に参加できていたと思う。キャンプファイヤーは外で行い、火も使うため安全管理をしっかり行わなくてはいけないことが身に染みて分かった。初めての野外活動支援で、容量がわからず、自ら動く、ということがあまり出来なかったのは反省点であるが、児童が楽しく野外活動を行うために取り組めた。基本的には児童自身で行う自主性を大切にし、声掛けを積極的に行うよう努めた。飯盒炊飯では、袋にお米と水を入れる作業の際に、上手くできずに泣いている児童がおり、気づいて対応することができた。片付け等は、する児童としない児童に分かれていたため、していない子に手伝ってくれる？と尋ねたり、一緒にしよう！と声をかけたりした。そのようにすると、どの児童も片付けを行ってくれたので良かった。キャンプファイヤーの時は、スタンツで児童を盛り上げられるよう、一生懸命取り組んだ。児童のスタンツ中は、児童の声が聞き取りにくいことが多いため、周りの児童にルールを伝えたり、立つ・座るよう指示をしたりした。また、体調が悪そうな様子の児童に気づいて積極的に声をかけ、状況を確認した。視野を広く持って動けた。

（特別支援教育専修１回生　長尾希颯）

奈良市立三碓小学校野外活動支援

◆概要

野外炊飯での火の管理と子供たちの安全確認、洗い物の補助。
宿泊施設での布団の敷きの確認、お風呂への誘導、安全確認。
キャンプファイヤーでのスタンツの盛り上げ、スタンツ、安全確認。

（音楽教育専修１回生　濱本和律）

◆自分で考えたこと

今回の野外活動支援で考えたことは言葉選びの大切さだ。ご飯をお皿に入れるのをやりたくないと言う子がおり、「やってみる?」と問いかけた時はやりたくないと言っていたが、「おこげのパリパリ取るの楽しいよ!」と言っておこげを取る所を見せるとその子は興味を示してくれて、「やりたい！ 楽しそう」と言ってくれた。他の人の分もご飯をお皿に入れてあげていたので、このように言葉を少しかえ、やる所を見せてあげると子供たちは興味持ってくれることがわかった。

（音楽教育専修１回生　濱本和律）

今回の活動から、子どもたちがいかに活動的であり、その活動の幅を広げるには教員の入念な準備・柔軟な対応が必要なのかということを学んだ。過去に自身が野外活動に生徒として参加した際には到底想像もつかなかった先生方の努力を目の当たりにした。宿泊活動ということもあり、子どもたちの安全確保にはかなりの配慮が必要であったと考える。送迎・飯盒炊飯・入浴等・キャンプファイヤーなど危険が生じる場面は数多くある。これらへの配慮もしつつ、子どもたちの記憶に残り、かけがえのない経験となる活動を創り上げる補助をする先生方は本当に尊敬する部分に溢れていると考えた。これからの活動、将来教員になった際に、この経験を生かせることができるように、忘れることなく、これからの学習・取り組みにもつなげていこうと心に決めた。

（特別支援教育専修１回生　田畑朗）

奈良市立富雄南小学校野外活動支援

◆概要

富雄南小学校の５年生の野外活動の二日間ある中の、一日目のサポートをさせていただいた。主な活動内容としては、オリエンテーション、野外炊飯、キャンプファイヤーの支援である。まず、オリエンテーションでは、野外活動センター外を子どもたちが探索し、チェックポイントに学生や教員が立っているというものであった。野外炊飯では、カレーを作り、野菜などの食材を切る作業を教える支援を行った。キャンプファイヤーでは、雨天のため、屋内でキャンドルファイヤーを行った。ユネスコクラブとしては、２つスタンツを行った。

（社会科教育専修２回生　横井琴音）

◆ 自分で考えたこと

今回の野外活動支援では、タイムスケジュール通りに進めるために臨機応変に行動することが大切だと学んだ。野外炊飯のとき、本来児童が行う部分を、時間の関係上、学生たちが行うという場面があった。それは、野外炊飯の準備で、食器や材料を班ごとに人数分を児童らが持ってくるというのがあったが、時間の都合上、学生が行った。私自身想定していなかった動きだったが、周りを見て行動することができた。一方で、児童たちも役割を分担し、時間を意識して行動している様子であった。また、当日は気温と湿度が高かったので、児童たちの様子を確認し、水分補給をするように声かけを行い、児童たちが常に安全に活動できるように視野を広く持つことが大切だと学んだ。野外炊飯でも、たくさんの班が同時に活動する中で進みが遅い班や役割分担通りに進められていない班に先生方や私たちがサポートに入ることで円滑に進めることが出来ていたと思う。このように野外活動では、視野を広く持ち、必要なところに臨機応変にサポートに入ることが大切なのだと感じた。次の機会では、この学びをより活かし、より学びを深めたいと思う。

（英語教育専修２回生　澤井咲樹）

オリエンテーションは初めてだったため、児童が途中で迷うなどの、安全面での課題があるのではないかと考えた。また、私はチェックポイントに立ったうえで、途中見てきたものを聞くということをしたが、このような実践にもESDの視点から考えられるのではないかと考えた。野外炊飯では、野菜の切り方でも、児童にさせるべきであるが、危ない所もあり、どこまで手を出すべきなのかについて、悩まされた。キャンドルファイヤーであるが、今回で３回目の野外活動支援であることもあり、掛け声やスタンツもおおよそうまくいったのではないかと思う。しかし、前述の通り、雨天でキャンプファイヤーではなく、キャンドルファイヤーでの実施となり、臨機応変にどのようなときも、すべての可能性を想定しておくことの重要性に改めて気付かされた。

（社会科教育専修２回生　横井琴音）

奈良市立安堵小学校野外活動支援

◆概要

安堵小学校第五学年 44 名のキャンプファイヤーの支援とスタンツを行った。スタンツは一番目に「みんなの広場」で緊張した面持ちの子供たちと打ち解け、その後のキャンプファイヤーが盛り上がるように努めた。また、子供たちの三つ目のスタンツ「怖い話」が終わった後、その流れ に沿い、「怖さを吹き飛ばす魔法の歌と踊り」として 「ゴーバナナ」 をした。

（社会科教育専修１回生　小南舞桜）

◆自分で考えたこと

今回、私にとって初めての野外活動支援ボランティアであった。学んだことは、三つある。１つ目は、慣れないことでも努力をすれば克服できることである。今回、野外活動支援の経験はないが、リーダーという責任ある役をいただきスタンツの回し役になった。人前で大声を出したり、予想外のことを即興でおこなったりすることが苦手だったが、野外活動支援に参加したことで度胸がつき臨機応変に対応できるようになったと思う。スタンツの一つ「みんなの広場」は、キャンプの最初だったのでいかに盛り上げられるかが肝であった。大きな声を出す、みんなが集まれるお題を出すなど工夫して取り組んだ。２つ目は、子どもとの関わり方である。子どもたちと楽しく話をしている時と、注意するときの使い分けが大切だと学んだ。例えば、静かにさせるためにあえて先生が黙ったり、楽しくするときは、教師が先頭に立ってはしゃぎ子どもたちを楽しませようとしたりすることである。また、どんな時も火の近くに子供が近づかないよう見張っておられて感動した。教師一人一人が、全体を見つつ、個々のチェックも抜けることなく仕事をされているのだなとわかった。３つ目は、連絡のマナーである。小学校と直接メールをするので、気が抜けなかった。メールが来たら、なるべく早く返信する、期限の二日前には仕事を終わらせるなど細心の注意を払ってのぞんだ。難しかったが、学んだマナーはこれから大いに役立つと思う。

（国語教育専修２回生　田中愛花）

今までの野外活動ではキャンプファイヤーを楽しむ側として参加していたが、今回は盛り上げ、子供たちの様子に注意する側に立場が変化した中で、先生方の指導や子供たちの様子のどちらもよく観察することができた。子供たちは名札を見なくても自分の名前を覚えてくれていて、暗闇の中後ろ姿だけでもわかるなど、子供たちの吸収力に感動した。先生方は日頃から子供たちを静かにする術や習慣を身につけており、その動作に共鳴して静かになることができる子供たちとの強い信頼関係を感じることができた。

（社会科教育専修１回生　小南舞桜）

奈良市立平城小学校野外活動支援

◆概要

活動内容としては飯盒炊飯とキャンプファイヤーを行った。飯盒炊飯ではカレーをみんなで作った。途中キャンプファイヤーの前に大雨が降り、計画の変更が懸念されたが、少し雨が弱まった時に、私たち学生を筆頭にスポンジで水溜まりを無くす作業を行ったことで、最終的にはみんな楽しみにしていたキャンプファイヤーを行うことができた。キャンプファイヤー後はみんなで川沿いに蛍を見にいった。

◆自分で考えたこと

今回、野外活動のボランティアを始めて行った。５月から京都の山城教育局の学生ボランティアには参加しており、活動はしているが母校の中学校に行っているため、小学生とのかかわりはあまりなかった。その中での初めての野外活動ボランティアであったので緊張と不安があった。しかし、この野外活動のボランティアを振り返って一言で表すと、非常に楽しかった。自分にとって貴重な経験となり、充実した時間であった。行うまでは、計画通りに進むのか、何か問題が起こった時に自分がうまく対処することができるのか、足を引っ張ってしまうのではないか、と不安があった。しかし、そんな不安も忘れ、子供たちと楽しみ、沢山の思い出を作ることができた。子供たちもしっかりしており、先生方や先輩方の力もあって、無事終えることができた。終わった後はさみしさと共に、大きな達成感を感じることができた。途中豪雨の関係で夕方からのキャンプファイヤーができるかどうかわからなかった。そんな中でも、子供たちが楽しみにしているキャンプファイヤーをできないか、何かいい方法がないかを考え、スポンジで水たまりの水を吸い取り、無事キャンプファイヤーを行うことができた。服や体はドロドロになったものの、子供たちの悲しそうな顔を見ると自然と活動に専念できた。子供たちの笑顔を見られて本当に良かった。「ありがとう!」 と子供たちに言ってもらえた時は心の底からうれしかった。キャンプファイヤーと共にとても心が温まった。この活動を通して、自分が子供たちと関わることが好きであることを再確認できた。これからも積極的に参加していきたいと思う。

（英語教育専修１回生　田中天央衣）

奈良市立飛鳥中学校　創立４０周年記念事業におけるキャンプファイヤー補助

◆概要

11 時 40 分に ESD-SDGs センターに集合し、12 時半頃から吹奏楽の演奏を聞き、14 時 30 分頃までは飲食や生徒たちが準備したスーパーボールすくいや輪投げなどのゲームイベントを楽しんだ。15 時からキャンプファイヤーの準備を行った。太鼓や下の板を運んだり、ブルーシートを広げたり、キャンドルに水を注いだりした。17 時 30 分頃から生徒や保護者、地域の方々がグラウンドに集まり始め、誘導や声掛けを行った。18 時前にはキャンプファイヤーが開始し、点火や「燃えろよ燃えろ」の歌、スタンツなどが順番に行われた。キャンプファイヤーの最中では、保護者による歌や太鼓演奏が行われた。19 時過ぎ、５分間ほどの豪華な花火が打ち上げられ、生徒たちと共に見学した。その後キャンプファイヤーは終了し、片づけを手伝った。太鼓やブルーシートを元の場所に戻し、火の後始末をして撤収した。20 時頃に先生方に挨拶をし、終了した。

◆ 自分で考えたこと

初めてのキャンプファイヤー補助で何も分からない状態だったが、多くの方に教えていただき、無事に終えることができた。生徒だけでなく、先生方も一緒に楽しまれている様子を見ることができた。中学生が一生懸命頑張っている姿を応援できるのも教員をする魅力であると考える。そして、キャンプファイヤーについて、準備から本番まで成功することを願って行動した。準備では、太鼓や大きな板など重い荷物を運んだり軽く誘導をしたりした。本番では、生徒会を中心にスタンツや点火が行われた。周りの生徒も盛り上げ、楽しいキャンプファイヤーになった。生徒に関してもキャンプファイヤーへの参加は自由とされていたが、ほとんどの生徒が残って参加していた。特に大きな怪我やトラブルなく成功した。先生方はすぐに次の行程を考え、テキパキと指示をされていた。子どもたちの安全を考えると、子どもたちが楽しく安全に通えるような学校経営をしていくことも大切だと考えた。

1 日を通して分かったことは、飛鳥中学校は生徒、教員、保護者、地域の人々が協力し合って中学校を支えているということだ。片付けの時に教員、大学生に加えて数名の保護者の方が手伝っておられた。地域の人々もキャンプファイヤーを見に来られていた。学校行事を多くの人が支えることの重要性を理解した。こういった人々のつながりは、まさに ESD の視点の連携性と育てたい ESD の資質・能力の協働的問題解決力に当てはまると考える新たな気づきや交流が多くあった。またキャンプファイヤーの補助などがあればぜひ参加してみたい。

（社会科教育専修３回生　東晃太郎）

あすかバンド野外活動支援

英語教育専修２回生　澤井咲樹

◆概要

飛鳥小学校の体育館で、地域の方や保護者の方と一緒に音楽をテーマとした楽器の発表会を行われた。ユネスコクラブからも、来場者の誘導や、スタンツを披露し、場を盛り上げた。その後、運動場で水鉄砲大会が開かれ、その準備をしたり、児童らと一緒に遊んだりした。

◆自分で考えたこと

今回の活動支援では、音楽が作り出す一体感を感じることができ、一生懸命演奏する児童・生徒、地域の方からパワーをもらうことができた。私達も、音楽を使ったスタンツを行うという形で参加して、場を盛り上げようとしたものの、うまくいかない部分もあったと思う。もっと周りを巻き込んで、一緒に楽しめるように声掛けをするなどの工夫をすべきであったのではないかと感じた。特に、保護者の方や地域の方にも積極的に参加してもらえるようにする必要があったと思う。私たちのスタンツの以外は、演奏を聞くという形式だったので、参加者の方たちが急に体を動かしたり、歌ったりするのは少し抵抗があったように見受けられた。来年、もう一度参加する機会があれば、参加しやすい空気感と、参加者を巻き込んで一緒に何かをしやすいように心がけたいと思う。

仰木の里小学校　修学旅行支援

◆概要

修学旅行で訪れた小学生に、東大寺を巡りながら SDGs を考えさせる支援。

◆　自分で考えたこと

仰木の里小の児童は、比較的落ちついていて、真面目な子が多いように感じた。それは、児童同士で指摘しあうことができる雰囲気が出来上がっているからこそだと思う。また、SDGs についても修学旅行に来る前に熱心に勉強していたようであり、聖武天皇がねがった「動植ことごとく栄んと欲す」の話をすると、SDGs の 14・15 番に結びつけて話をしていた。さらに、大仏を作った背景についた話をしたのちに、「聖武天皇はどんな思いで大仏を作ったのだろう」と聞くと、日本が平和な世の中になるためや、感染症が拡がるのを防ぎたかったのではないかという声があがっていた。これもまた SDGs との関連があるということに気がついていたようだった。

一方で、東大寺の大仏の造立の話が香楽宮で出されていることから、滋賀県で大仏を作ることが決まったと伝えると、児童は驚いており、滋賀県と東大寺は実はつながっていたことに気づいていた。寄付やボランテイアといった様々なつながりがなければ、大仏を作り上げることはできないことから、自分たちに何ができるかを問いかけると、今日の話を「家族にする」という回答があり、聖武天星の思いをしっかり自分ごと化できたからこそだと考える。

ガイド中に、自分が話しすぎてしまうところがあるため、もう少し焦点を絞って話したほうが良かったと思われる。しかしながら、賢い子が多かったため助けられた部分があったが、これが大人数や、荒れた学校の児童を目の前にしたときに同じ方法でやっていけるのかと疑問を抱いた。

この点を今後深めていきたい。

（教職大学院学校教育マネジメントコース（Ｍ１）　井上 岳海）

第１回　春日山原始林･奈良公園フィールドワーク

◆概要

〈特徴的な自然環境と課題〉

・野生動物の増加による幼木の生長妨害

実際に見てみるとかなり広い範囲でギャップがうまれており、枯れ木や倒木の周りは荒廃したような状態になっていた。

・ナラ枯れとキクイムシによる枯れ木の増加

キクイムシ自体は想像より小さかったが、木を枯らすほどの影響があることと、その生息する量の多さを考えると大きな問題がある

・外来種による森の変化

シカが食べない外来種の増加により、森に本来あるはずのない植物の生息域が拡大していた。

◆　自分で考えたこと

春日山原始林で、様々な植物に触れた。人の手が加えられていない自然は、多くの生物・植物の居場所となっており、自然の美しさを感じた。体全体で自然を感じる体操を行ったことで、風の少しひんやりとした温度、日の光の暖かさ、小鳥のさえずり、水の流れる音、風の小さな音を全身で理解することができ、良い体験であった。葉っぱじゃんけんやオノマトペゲームを行ったことで、原始林にある植物を目で見て、触って、音を聞いて、時にはにおいをかいで、としっかりと観察することができた。また、自分の選んだものについて言語化して自分の考えを説明する力を養えた。春日山原始林の課題として、ナラ枯れ・ギャップ・外来種の占拠・鹿の増加による被害を目で見て知ることができた。ギャップなど、高校までで学習してきたことが、実際に自然の中で学習することができた。多くの出来事から、自然がどんどん破壊されていっている現状を知ることができ、非常に深刻であると感じた。そして、樹齢 1000 年以上もある木が存在するような春日山原始林の自然の力に感動するとともに、そのような大自然を昔から守ってきた人々の強い思いを感じた。　　（特別支援教育専修１回生　長尾 希颯）

第２回 春日山原始林･奈良公園フィールドワーク

◆概要

春日山遊歩道の北部を歩きながら、夏になり出てきた虫や植物の観察と春日山の概要・環境保全問題について学んだ。カタツムリやザトウムシ、ハチといった普段から見かける生き物だけでなく、シーボルトミミズやクモタケのような冬虫夏草などの珍しい生き物も見つけることが出来た。鹿の食害やナラ枯れ、外来種の侵入などの環境保全問題について知った。

◆ 自分で考えたこと

棚の木はもともと春日山に自生しておらず、熊野から苗を持ってきて増殖し、鹿も好まないため数が増えてしまった。しかし、春日大社の神としての利用やそもそも熊野からもらったものとして神聖視されているため、「駆除」はしにくい。今年の９月に「数量調整」を始めるということを知った。原始林を保存するために伐採は必須であると思う。しかし、神聖なものとして利用されてきた歴史もあるので、利用だけにとどめ、原始林の棚は雌の木から減らしていくべきだと考える。

ナラ花れのように虫が侵入して木が枯れてしまうことは、黒山でも起きていることを知った。果物農家さんが困っていることは知っていたので、想像しやすかったが、知らない人も多いと思う。そこから、被害状況を発信することが重要だと考える。また、くいを打ってチェックしているが、すべてのナラの木をチェックすることは難しいと思うので、上空からの調査などもしてみたらいいのではないかと思う。鹿の食害によって生えている木が少なくなり、風雨で土砂が流され、大雨の際に土砂崩れが起きやすくなっており、実際に被害も出ている。天然記念物どうしである春日山と鹿は人間の手によってこれからもバランスを保っていくべきだと思う。しかし、奈良という鹿の個体数をすぐには減らせない特殊な環境下において、愛護会や地域住民の理解が必要になってくると考える。

（社会科教育専修１回生　小南 舞桜）

第３回春日山原始林･奈良公園フィールドワーク

◆ 概要

春日山原始林の特徴とも言える文化的背景である石仏群を巡り、自然と人の関わりについて学ぶ。

◆ 自分で考えたこと

春日山の石仏が気になり参加したが、自然についての知識も増えたほか、歴史とのかかわりやシカの食害の影響を目の当たりにした。

輪唱をするヒメハルゼミの鳴き声や水に入れて振ると泡が出るムクロジ、鉤を他の木にひっかけて育つカギカズラ、粘菌など初めて知る生き物がたくさんいて視野が広まり、古い石の鹿垣と現在の柵の鹿垣、春日大社など古い絵図に自分が今日フィールドワークで歩いている石畳や神仏習合の名残を見て、過去と今のつながりを感じた。また、鹿の食害を防ぐために植物を覆う柵の効果が、想像以上に大きく驚いた。ヒルへの対策の仕方として、服装やヒル除け、火を近づける以外にも、塩をかけるなどの方法があるとわかり、フィールドワークにおける安全対策の知識も増えた。

今回学んだ自然についての知識や自然観察の視点を生かして、春日山の生きものだけでなく、日常で何気なく見ている生きものにも注意を働かせたり存在を認知したりできるようになりたい。また、フィールドワークに限らないが自然や建造物などを見て、過去の絵図など資料から読み取ることを組み合わせてより深い学びができるためより多角的な視点を持ちたい。

（社会科教育専修１回生　金川 恵人）

第４回　春日山原始林フィールドワーク

◆ 概要

夜の春日山原始林を散策し、五感を使って自然に触れ自然環境を保全することの大切さについて考えるためのフィールドワークであった。日が沈む時間帯に山に入り、春日山遊歩道を歩いて夜の春日山原始林を散策した。散策ではガイドの方から原始林についての説明や、動物の生態についての解説をお聞きした。また、途中山奥でレジャーシートを敷き休憩したり、寝転んで天体観測をしたりした。

◆ 自分で考えたこと

レジャーシートに寝転び天体観測を行った際には、天気が良かったため星空がよく見え、久しぶりに夜空がきれいだと感じた。それと同時にフクロウなど様々な動物の鳴き声を聞くことができ、目と耳で自然を感じた。自然の素晴らしさや美しさを体感できる体験であったように思う。また、フクロウやムササビなど実際に貴重な動物に出会うことができ、山の中に入れば体感温度が一気に下がるということなど今までに体験したことのない経験をすることが出来た。このフィールドワークを通して五感で自然に触れることの素晴らしさを学び、このような体験ができる場所を残していかなければならないということを強く感じた。さらに、今回私が出会った動物たちを保全するためにも我々人間が春日山に住む動植物の領域に侵食しすぎない程度に保全活動を行っていかなければならないと考えた。

春日山をはじめ未だ日本に残されている自然を残していくためにも、保全活動に参加したり自然の魅力を伝える活動にも参加したりしてみたいと思う。また、日頃から、ごみのリサイクルや分別を行うなど環境に配慮した暮らしを心掛けながら自然と共生していきたい。さらに教員となった際には子どもたちにこのようなフィールドワークの機会を設け、美しいものを美しいと感じ自然を大切にしようとする態度を養うことにつなげたいと考える。

（教育学専修１回生　長谷川 凛花）

第８回 春日山原始林･奈良公園フィールドワーク

◆ 概要

2023 年 10 月 21 日(土)に春日山原始林・奈良公園フィールドワークの第八回に参加した。
春日山の南側に位置する高円山を歩き、春日山との違いを体験するとともに森の利用について考えるフィールドワークであった。

◆ 自分で考えたこと

考えたことは三つある。

１つ目は、ナラ枯れ防止のビニールの後処理についてだ。
高円山の中に、枯れて倒れた木があった。その木はナラ枯れ防止のビニールがまかれていたが、それが一部取れて木の周りに散乱していた。いずれそのビニールは粉々になり、マイクロプラスチックになると杉山先生がおっしゃっていた。このビニールの後処理はあまり考えられておらず、そのままになることが多いそうだ。また、回収まで手が回らないことが現状だそうだ。春日山原始林ではこのビニールを回収する活動がされているそうだが、毎回大量のビニールが回収されるそうだ。
ビニールの回収まで手が回らないお話から、土に分解されるビニールを採用すればこの問題は解決するのではないかと考えた。

２つ目は、自然と人々の関係である。嫁入り道具として桐ダンスを持たせるという話を聞いたことがある。なぜ桐なのか今までわからなかった。勝手に丈夫だからなのかと思っていた。しかし、「桐は成長が早いため、女の子が生まれると同時に植える」というお話を聞き、「だから嫁入り道具に桐ダンスなのだ」と合点がいった。このように昔の言葉と自然は密接につながっているのではないかと思った。現在、私のように「嫁入り道具に桐ダンス」の意味がわからない人や知らない人が多いのではないかと考える。自然が昔ほど身近でなくなったため、この言葉の意味は知りようがなくなっているのではないかとも考えた。

３つ目は、ナンキンハゼについてだ。ナンキンハゼは鹿が食べないため、高円山、春日山原始林どちらでも増えすぎており問題になっている。ナンキンハゼでロウソクを作ることができるお話を聞いた。奈良県出身であるのにも関わらず、春日山原始林の問題は大学生になるまで知らなかった。春日山原始林が抱える課題の知名度はそれほど高くないと考える。この問題を知ってもらうと共に、ナンキンハゼを有効活用するために、ナンキンハゼからロウソクを作り、販売するのはどうだろうかと考えた。売り上げは春日山原始林保全に利用する。この案の実現可能性は、今の知識だけで判断できないのでまたナンキンハゼ等について調べていこうと思う。

くらしのブンカサイ in いこま

◆概要

ユネスプグラブでは、①生駒市について考えるブースの出展、②奈良北高校の生徒と合同でクイズステージの企画を行った。①のブースでは、くらしのブンカサイに来場された方に「生駒市をよりよくするために」というテーマのもと、コメントを葉の形をしたカードに書いてもらった。

◆ 自分で考えたこと

今回のイベントでは子どもから大人の方まで幅広い年代の方と触れ合う貴重な機会となった。その中で考えたことが２つある。

１つ目は、市民の方の意識の持ち方についてだ。私たちは「生駒市をもっと良くするためにはどうするか」という点を考えてもらおうと思い企画を作ったのだが、実際に企画として行ってみると「生駒市で暮らしていて困ったことは無い。」、「もうすでに住みやすい街だし。」という意見が多く、カードが集まらなかった。そこで、「生駒市の好きなところや良いところは?」と質問してみると、「景色がきれいなところ」、「子育てがしやすい街」というように多くの意見が集まった。その意見の中には生駒市が SDGs の活動に積極的に取り組んでいることを知っている、というものもあった。SDGs に関する取り組みなどは、一人一人が意識して自分に出来ることを考えて取り組んでいくことが重要である。その点で生駒市は市民の方たちが自分のこととして捉えることができている街なのだと感じ、市民の方の賛同や意識の持ち方が SDGs の活動を行っていくうえで重要になるのではないかと考えた。

２つ目は、答えのない問題についてだ。今回行った「SDGs クイズ」では、はっきりと答えがあるわけではない身の回りの問題に対して、子どもたちと一緒に考えることが目的の企画である。そこで出題した「食べ残しなどから出る給食のごみを減らすために、給食を廃止してお弁当を持参することにした」という問題に対しての子どもたちと保護者の方の反応が少し違ったのが印象に残っている。子どもたちは、「好きなものが食べられるお弁当の方が食べ残しが減るのではないか」という意見に対して賛成の雰囲気があったのだが、それに対して保護者の方は栄養バランスやお弁当を作る手間などから、あまり賛成とは言えないという雰囲気があった。このことから、0x クイズという名前で今回は企画をしているが、実際に身の周りにある様々な問題の中にははっきりとどちらが正しいかを決めることはできない問題の方が多いのではないかと感じた。そして、答えがない問題に取り組んでいく際に大切なのはどちらの意見も聞くことであると考えた。先述した給食の問題で考えてみると、取り組みを行っていく際に、環境などに対しては給食を廃止した方が良いが、お弁当を作ることで負担がかかってしまったり栄養が偏ってしまったりしたら他の SDGs の目標的には正しいとは言えないのではないか、となる。そこで、1 週間に 1 回はお弁当の日を作る、給食で食べ残しが減るような工夫をする、というどちらの意見も取り入れた取り組みを考えて行っていくことが重要ではないかと考えた。実際に生駒市では食べ残しを減らすために「ラッキーニンジン」という星型のニンジンを給食に入れて子どもたちが楽しんで食べられるようにする取り組みが行われているそうだ。

以上のことから、SDGs の取り組みを行っていくには、まずは一人一人が意識することが大切だが、地域の人々、街の人々など全員が共通した意識をもって一緒に取り組んでいくことが大切だと感じた。そのためにはお互いに意見が言える環境があり、話し合いを重ねて納得した上で取り組む必要がある。私が教師になった時には、クラスや学校が、お互いに意見を言い合い SDGS など身の回りの問題にについて考えていくことができる環境を作りたいと考えた。

（書道教育専修２回生　神余 友唯）

あつまれ ECO キッズ！！

◆ 概要

・運営に携わり、エコキッズが円滑に行われるようにする
・スタンプラリーのスタンプ配布または確認と書類の配布
・受付
・それぞれのブースの説明
・実際にブースを体験する

（英語教育専修２回生　黒柳新奈）

◆自分で考えたこと

子どもが参加する企画だったが、運営の担当場所によって子どもと関わる頻度が異なった、前半では、スタンプや書類の配布を行ったが、まずは自分で必要事項を確認できるように働きかけ、それでも難しい場合は運営担当の人など周りの人に相談してしっかりと確認が取れるようにする必要があると感じた。その日行うことの説明は、エコキッズが始まる前にされたが、それぞれのブースについての説明がされなかったため受付をしているときに質問されてもわからないときがあった。そのため受付を担当する際にはそれぞれのブースの概要を聞き、実際に自分で確認することで来客の人の質問に答えられるようにする必要があると感じた。ブースごとに子どもたちに学んでほしいことが決まっていた。実際に体験したブースの中でも、クイズ形式で旬の野菜について考え、それを地産地消に結びつけるという活動が興味深いと思った。比較的幼稚園児や保育園児が多く来ていたので来客の年齢を考慮してブースの内容を検討すると多くの人が楽しみながら学べると思った。

（英語教育専修２回生　黒柳新奈）

ECO キッズのイベントを通して考えたことは２つある。１つめは、子どもたちの地球温暖化に対する視点の新鮮さだ。今回の子どもたちのアイデア作文の中に「地球温暖化を利用した家」という作文があった。この作文では、地球温暖化による熱をお風呂のお湯を沸かすことに利用する、台風や豪雨による雨水をトイレなどに利用する、トイレは落差を利用して発電する、家のドアはスライド式にして発電できるようにする、というようなたくさんのアイデアが登場していた。この作文を読んで、今あるものを最大限に使うという視点がとても新鮮に感じた。今まで私は豪雨を減らすために、暑さを和らげるために、という視点でしか考えてこなかった。しかしこの作文では今の環境を最大限活用し、これ以上地球温暖化が進まないようにしよう、という視点で考えられている。地球温暖化をネガティブに捉えるだけでなく、利用できる資源としてポジティブに捉えようとする見方をする必要もあると考えた。

２つめは、子どもたちの生活に当てはめることについてだ。今回の ECO キッズではスタンプラリーと一緒に普段の生活で行っているエコな取り組みについてのアンケートを行った。そのアンケートの内容には、「食品ロスを減らす」や「電気の使用量を減らす」というものがあった。しかし、このような書き方が子どもたちには少し難しかったようであった。しかし、「ご飯を残さず食べられていますか？」や「使わない部屋の電気は消していますか？」のように言い換えてみると、子どもたちも「できている！」、「やっている！」のように積極的にアンケートに答えてくれるようになった。このことから、より具体的に、生活の中で感じることのできる取り組みを子どもたちに分かりやすく伝えていくことが、環境問題やエコに関する取り組みと子どもたちを繋げやすくなるのではないかと考えた。

（書道教育専修２回生　神余友唯）

今回のイベントを通して、子どもたちに環境問題をどのように伝えればよいのかについても工夫しなければならないと感じ、私自身も、抽象的に捉えるのではなくより具体的に、この行動はどう環境に繋がっていくのかを考えていくことが大切だと感じた。約 200 人以上の参加があり、多くの人がエコについて考えるよいきっかけになったのではないかと思った。大阪ガスやならどっと FM など、様々な団体が出展されており、エコについて考えてもらえるよう、多様な工夫がなされていた。まつぼっくりでクリスマスツリー作成やブンブンゴマを作って遊んでみるなど、子どもたちが主体的に参加している姿がみられた。子どもが楽しく、遊びをとりいれながらエコについて考える、まさに ESD の様子を見ることが出来、良い勉強になった。おしごと体験の説明会の中には、クレジットカードについて学ぶ場面があり、学校では教えてもらえないようなことについても知ることが出来る、良い機会となっていることに気づいた。スタンプラリーでは、エコに関するアンケートがあり、子どもも大人もたくさんの方が回答してくれた。子どもたちは普段自分ができているかな、と考えながら答えている姿が見られた。毎日エコについて考えながら生活する、というのはなかなか困難であるが、このような機会を期に一度自分の生活を振り返る、というのはとても大事なことだと感じた。

（１回生　長尾希颯）

小学生の作品を鑑賞していて、発想がとても柔軟であることに気づかされた。作品の中には実現すればもっと奈良は住みやすくなる、地球にやさしい取り組みになる、と考えさせられるものが多いように感じた。また、アンケート調査にも子どもたちは積極的に参加してくれ、環境にやさしい取り組みとして自転車に乗ることやお風呂に入るときに意識していることなど、子どもたち自身が実際に取り組んでいるエコ活動について知ることができた。子どもたちも地球に配慮して生活しようとしていることがうかがえ、生活の中にエコ活動が組み込まれてきているのではないかと考える。さらに、幅広い年齢の子どもたちがお仕事体験や様々な体験活動を通して楽しみながらエコ活動をしているのがとても印象的だったため、このような活動がエコ活動推進のきっかけになるのではないかと考える。

（１回生　長谷川凛花）

◆概要

牛乳パックでのほうきとちりとりづくり

（数学教育専修１回生　中澤優花）

◆自分で考えたこと

今回私は初めて大きな企画に参加した。子供と接する機会もこれまで少なかったため、上手く作り方を説明できるか不安ではあったが、やっていくうちにコツを掴んで上手く説明できるようになってきた。子供たちに対して質問してみたり、今好きなこととかを聞いたりして、子供たちと触れ合うことができたので良かった。また、この牛乳パックでの工作を通して、ゴミを分別することの大切さを合わせて教えることができて良かった。

（数学教育専修１回生　筒井茉啓）

今回企画する側を初めてさせていただいて、とてもいい経験になった。今までサポートする側として企画に参加したことしかなかったので新鮮で最後まで楽しんで企画することができた。準備段階でどれくらいの子供たちが来てくれるのか分からないので少し不安だったが、午後からは特にたくさんの子供たちがやりたいといって訪れてくれたので、とても嬉しかった。最初はどのように教えればいいのかや、どのようにコミュニケーションをとればいいのかがわからず、探り探りな部分があったが、段々とその子にあった方法を教えることができて成長できたと考える。休憩時間にほかのブースを見てみたのだが、子供たちが楽しくエコについて遊び学んでいる様子が見てとれた。そして、今回の自分が思う改善点はほうきとちりとりと紙芝までの時間が長かったことだ。小さい子は特に時間がかかってしまって 30 分ほどかかった。保護者の方がその間ずっと立ったままであったり、やりたいけど次に予定が入ってしまっていて長時間いれないという子もいたりしたので、もう少し短い 10～15 分程でできるものの方がいいのではないかと思った。また、分からないことがあった時に指示待ちになってしまったので、もう少し主体的に行動できるように努力していきたい。

（数学教育専修１回生　中澤優花）

第１回 森と水の源流館授業作りセミナー

◆概要

第１回森と水の源流館授業作りセミナーで、森と水の源流館のスタッフの方による、自然環境保全の取組や水生生物などに関する情報を提供していただいた。主に、川上村及び源流館について、ESD の授業づくりの基本について学んだ。そして、いろいろな川上村の地域資源をもとに、ESD に活用できそうなネタと、実際にどのように行動に移せばよいかを考えた。

（英語教育専修２回生　澤井咲樹）

◆ 自分で考えたこと

大滝ダムと大迫ダムという２つの人工ダムがあることはもちろん知っていたが、自然のダムである緑のダムは知らなかった。川上村は自然が豊かであり、森林を生かしたダムは環境にも良いと考える。水量を森林や土壌が調節し、自然も育っていくことで、自然と人が調和するのではないかと思った。川上村にある看板には「かけがえのない水があなたに届くためにあなた自身にできることは、何でしょう？」と書かれている。この問いかけに対して、私はゴミを捨てないことと答えるだろう。ニュースでも川上村のゴミ問題はよく取り上げられていると思う。観光客に「どうして川沿いにゴミが落ちているのですか？」と聞かれたとき、「あなたたちのような観光客が捨てていったんですよ。」と答えるそうだ。そう言われると当事者意識を持つ。決して他人事ではなく、自分事として考える必要があると思う。奈良県は県域水道の広域化によって、私が暮らしている町の水は大滝ダムからきているということを「政治学」の授業で学んだ。いくら、ろ過されているとはいえ、ゴミが落ちている側を通ってきた水が流れていると思うと、やはり安心できない。みんなで川をきれいにしていく必要があると思った。ESD の視点で川上村の自然を守るための地域学習を考えてみたい。

（社会科教育専修３回生　東晃太郎）

ESD に取り組むことで、地域と人がかがやき、つながるきっかけになるのではないかと考えた。川上村の例から、村の人口減少を、伊勢湾台風の水災害の視点から考え、現代の水災害の被害やそれに取り組む人々に着目できる。そして、吉野林業が生物多様性に与える影響や、人々が自然に介入することの重要性に気づくことができる。川上村は水資源が豊富で、水質もきれいだが、コロナ禍でゴミが増え、川が汚染されていることから、「しないでください運動」が実施されている。ESD に取り組むことで、その地域の課題解決に役立ち、ESD の授業作りの基本として、現状把握だけでなく、過去との比較から現状をクリティカルの捉えなおし、目指したい将来を意識して、そのための行動化を促すことが大切だ。そもそも、ESD とは、持続可能な社会の作り手を育てるため、価値観と行動の変革を促す教育のことを指す。経済重視だけでなく、人間性の育成に重点を置くことが大切であるので、実社会を教材に、説明-納得型でなく、問題解決型の学習を展開する必要があるのだと考えた。

（英語教育専修２回生　澤井咲樹）

第２回 森と水の源流館授業作りセミナー

◆概要

企業は２種類の人を求めている。エキスパート(自分でどんどん勉強していく。でも、企業はそれ だけじゃだめ)とリーダーシップを発揮する人(仕事はチーム、チームに貢献できる人を求めている)。総合的な学習の流れとして、まず、SDGs の基礎を学んでから身近なものを例に吉野川の水の恩恵 を受けていることを知る。その後、教師側が設定した 10 個のテーマをもとに実際に森と水の源流 館へ行き、実際に見たり聞いたりして学んでくる。その後、学校に帰ってきて ESD の視点で考 え、自分たちが暮らす地域で考えて良さや課題を見つける。保護者や近所の人にもインタビューをして集まったデータを集計、具体化する。時間軸をずらすために昔から住んでいる地域の人を 学校に招いてインタビューする。インタビューの内容を「改善」「継承」「発展」の３つに分け、生徒らの興味のあることからそれぞれグループを作って考える。実際に市役所の人に来てもらい、それぞれ考えた企画に行政の面からのアドバイスをしてもらう。考えた地域でできるボランティア、清掃活動を実際に行う。

◆自分で考えたこと

川上村で、河川や山林周辺でバーベキューを禁止している理由が大切であると思った。川上宣言を行うだけは誰でもできて簡単なことだが、実際に火器の使用やゴミの放置、水をよごす行為を村全体で公言してやらないように呼びかけるというように行動に移せていることはとても見本にすべきだと思った。

実際に自分の身近な給食というところを始めとして自分の住んでいる地域まで考えを広げて自分たちができることを考えるだけでなく、実際に清掃活動としてボランティア活動を行うことができているのは素晴らしいことであり、生徒にとっても良い経験となっていると思った。総合の時間を使って１年かけて活動を作りあげていて大変だったと思うが、やり遂げることができていた。ただ水について学ばせるというだけでなく、コミュニケーション不足という課題も裏側で解決していくという２本軸のような構造で上手く進められていることに感銘を受けた。ブレイクアウトルームでお話を聞くと、小学校教員が似たようなことをやろうと思うと小学生は中学生に比べて知識量も大きく異なるため、どこから手をつけたらうまくいくのか難しいと言っていた。私は小学校教員を目指しているため自分の地域に沿った小学生でも進んで取り組んでくれるような教材を考え、工夫して作っていきたいと思った。自分の地域の課題がすぐには出てこないため、夏休みに帰省したときに周りに注目して課題を見つけてこれから考えていきたいと思う。また、森と水の源流館のように自分が知らないだけで学べる施設があるかもしれないので、調べて実際に足を運んできたいと思う。

（家庭科教育専修３回生　上部遥加）

第３回 森と水の源流館授業作りセミナー

◆概要

現職教員の単元構想案の発表

・「私たちの暮らしと水」 奈良県立青翔中学校 谷垣先生

・「奈良公園 推し活プロジェクト」 奈良女子高校 新宮先生

・「千歳地域の特色とは何かを考えよう」山形市立千歳小学校 阿部先生

・「外来種は殺すべき?一生物多様性を考えるー」 田原本町立田原本小学校

◆自分で考えたこと

各先生方の発表を通して感じたことが三点ある。一点目は、教員自身が疑問に感じたことから 単元構想を行っていること。二点目は、普段では当たり前すぎて見えていなかった部分を見える ようにしていること。三点目は、様々な繋がりが生まれるような単元を設定していることである。

一点目の、教員自身の興味関心から単元を考えているというのは非常に重要な視点だと考え る。それは、教員が疑問に思うことは、児童生徒も疑問に感じていることが多い。また、教員が 疑問だと思うことを、児童生徒に共有し解決していこうとすることが、ESD で育てたい能力の協 働的問題解決力と深く関係し大事なのではないかと考える。

二点目の当たり前を見えるようにしてあげるということは、児童生徒の批判的能力の育成につながる部分だと考えており、児童生徒の多くは当たり前に何もかもが進んでいると考える傾向に ある。そのため、当たり前すぎてバックヤードの部分まで目がいっておらず、当たり前というブ ラックボックスから解放させてあげることで、様々なことに気づき、多様な考えや価値観を持てるようになるのだと思う。特に、ESD の実践を行うにあたり、フィールドワークで地域を知ったり、ゲストティーチャーなどの、その道のプロの話を聞いたりすることが児童生徒の多様な価値観を生むと考える。

三点目の繋がりは、先にも述べたが、協働的問題解決能力を育むには必須の要素である。特 に、今回の発表で印象に残ったのは阿部先生の川の中流部の学校と下流部の学校で交流を行ったということである。これは、ひとつの川を通した繋がりを感じることができ、児童生徒にとっても同世代の他の学校の子たちがどんなことをしていて、自分たちにも何かできるのではないかと励みになる。以上三点は相互に関連しており、ESD の授業を行うにあたり、様々なことと関連させて考えることが重要であると考える。

（教職大学院学校教育マネジメントコース（M1） 井上岳海）

第四回　森と水の源流館授業作りセミナー

特別支援教育専修１回生　田畑朗

◆概要

学生の ESD 単元構想案の相互検討会

各地の現職教員の方々の ESD 学習指導案の発表に対し、グループに分かれ現職教員や我々大学 生、また森と水の源流館の方々の視点から検討を行った。発表の中では海に面していない地域の 学校や、現地の海産物を給食に出している学校など様々な環境の学校の教員によって、いかに子 供たちが理解しやすく、子供たちの実践を通して授業を行うかについて検討した。

◆自分で考えたこと

今回初めて「森と水の源流館授業づくりセミナー」に参加し、現職教員の方々や森と水の源流館の方々の ESD に対する考え、またそれを生徒たちに授業を通してどう伝えるかの検討の場に立ち会えたことから、これまでの ESD 関連の学びをどのように活かすか、伝えるかを深く学ぶことができた。私たちは現在、今までの経験などを結び付け、ESD 学習を行っている。しかし小学生からすればなかなか理解の追い付かない膨大な情報量だといえる。これをいかにして伝えるかが力ギだ。実際に発表された構想案には、水の恵みを学ぶため、関連的に物事を結び付け水の大切さを段階的に学習、実行したり、実際に生徒たちと河川を訪れたり、もしくは海の近くにある小学校との合同授業の検討、実際に地域の海産物を給食に取り入れることから学習に繋げるなど、様々な形態の授業づくりが為され得ることを学んだ。このセミナーでは主に「水の恵み」に関連 した授業づくりに関して多くを学んだが、これは「水の恵み」に関することだけではなく、ESD 学習のどの単元に関しても実行できるものであったと考える。これから ESD を実行できる教員になるために、大学の授業、今回のようなセミナー、ボランティア活動に多く参加する中で、いかにこれらの経験を生かすかを日々自身、もしくは今回のような場で検討することが重要だと考える。知識はまだまだ拙いが、これからも多くの SDGs、ESD に関したことを意欲的に学び、実践しようと決意する機会となった。

第５回森と水の源流館授業作りセミナー

◆概要

・奈良県青翔中学校谷本先生　校外学習と ESD を関連させて学びを深めていく！

・和歌山大学教育学部附属小学校 中谷先生 ピッピカピン大作戦

・奈良学園中学校・高等学校 原先生　環境活動の取り組み

・奈良女子高等学校 藪内先生　奈良公園を中心とした探究の実践

（社会科教育専修３回生　東晃太郎）

◆自分で考えたこと

４名の先生方の実践を聞いて共通して分かったことは、生徒たちの実態に合わせて関心が持てるように探究内容を設定されていたことだ。身近なことを川上村の水と関連付けて探究させることによさがある。それが、川や森などの自然全体を保全していく取り組みになるのだと考える。また、誰かに発信する、伝える活動が多かったようにも思った。谷垣先生は青翔宣言をつくり、中谷先生は 3B 宣言を行うといった工夫があった。学習した成果をこれからも残していくために誰かに発信することはとても重要なことだ。それぞれ小学生、中学生、高校生と発達段階に合わせた取り組み内容になっており、これも取り組みを続けられることにつながっていると考える。身近な水辺環境の保全をどのような授業構成で行えば、子どもたちが関心を持って取り組むことができるのかについて考えるヒントになった。これまでの内容も踏まえて、さらに来年度も参加して自身の論文にも生かしていきたいと思う。

（社会科教育専修３回生　東晃太郎）

私は和歌山の小学校の実践指導がとてもすごいなというふうに感心した。とてもきれいな小学校だからというところから考えを広げ、水を大事にしようという考えを広げていき、実 際に水と触れる活動をしていた。海の実態やゴミの実態などを知ることで、こどもたちがみんなで頑張ってきれいにしないと、と考えていた。様々なことを考えると、ゴミは上流から海に流れ着いてきているのではという考えが出てきて、奈良の川上村だ!と考えるようになり、実際に川上村に訪れるととてもきれいで子どもたちはみんな川上村のことがとても好きになったようだ。奈良に興味を持って愛してくれていることにとてもうれしさと、 誇り、そして私たちもこのきれいな環境を大切にしていかないといけないということを感じた。子どもたちは自らゴミ拾い活動に参加し、環境をよりきれいにするために自分たちでポスターを作成して、環境活動を推し進めていた。子どもたちのやる気を引き出すことができて、子どもたちの考えをしっかりと汲み取り、実際に体験する機会を与えることができる先生は、私の目指す教師像だと感じた。そしてこどもたちも実際に水に触れ、環境に実際に触れることで考え方がこんなに広がり、自分ごとに考えていけるのだというふうに感じた。

（英語教育専修１回生　上江佳加）

第１回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

持続不可能な現状から SDG s が提案された背景

SDG s が目指す「誰一人取り残さない」世界の実現のための取り組み

SDG s の枠組みと「普遍的（すべての人に当てはまる）、不可分・関連（相互に関連）、変革的・野心的（誰も置き去りにしてはならない）」という特徴

◆ 自分で考えたこと

SDG s についての基礎的な学習から、ESD へとつなげるためにはどうすればよいのかを考えながら受講した。子どもの身近な問題から取り上げ、それを発展していくことが重要であることが理解できた。そのため、どのような問題が子どもは想像しやすいのか、または想像しにくいのかを考え、授業内容を決めなければならない。例えば、授業内では奈良県は内陸部であるために、海洋問題についてイメージが難しい、ということが上がった。SDG s は、自分が持続可能な社会を構成する一員である、という自覚を持つことが必要であり、そのためには普段の生活で直接関連が少ないものであっても、想像力をもって世界の課題に向き合える力が求められる。まずは、子どもたちにとって身近なローカル SDGs から、グローバルへと発展させていくことがよい SDGs 授業展開の一つであると考える。

◆ 自分で発展させたいこと

授業後の質疑応答では時間上聞くことができなかった２点について自ら考え、発展させていきたい。

１つ目は、貧困の問題についてである。対策が不十分とされており、学級にもそのような家庭の児童は存在するだろう。わたしの考えたい点は、教員の立場で、どこまでその家庭問題に踏み込んでよいのか、ということである。貧困家庭では、学校の活動も困難となるケースもあり得る話だが、児童の学習機会を奪ってはならない。そこで、教員として助けたいと考えるが、家庭の問題に口を挟まれることを不快に思われることもあるだろう。その児童本人や家族に、どこまでの援助が可能なのか、具体的にはどのような支え方があるのか、ということを深めたい。

２つ目は、ジェンダーの授業内容について、LGBT といった性の問題についての授業を、子どもたちへどのように行えばよいだろうか、ということだ。授業で考えにくいとされているのか、私の高校では教えられることがなかった。確かに、女性の社会進出、という点も SDGs のジェンダー課題の一つであるが、LGBT といった人間の性についての問題も重要なことである。社会でも様々な活動が始まっているが、理解の不十分さが伝わるものばかりである。そのため、授業で広く取り扱い、問題や苦しむ人々を知ることが必要であると感じる。そのため、どのような授業をすれば、子どもたちが興味を持って授業に取り組んでもらえるか、という具体的な方法を考えてみたい。

（特別支援教育１回生　長尾　希颯）

第2回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

今まではローカルな ESD の取り組みが行われていたこともあり、それでその地域では成果が出ていたが、それだけでは地球規模の目標である SDGs に貢献することはできない。だから最近ではグローバルな ESD が行われている。俯瞰的に世界規模で活動できるが、どのように子供たちに受け継いでいくかが問題である。また、世界の SDGs に取り組むためには、まず足元の SDGs に取り組むことが重要である。国レベルの ESD がとても大切になってくる。また、ESD for SDGs 推進の 5 つの視点を持ち、取り組むことが大切である。

◆ 自分で考えたこと

ESD 教育に学校で取り組むのはとても大切なことである。しかし、それがその学年だけであったり、その校長先生や担任の先生がいるときだけであったりに限られてしまってはいけない。たとえ先生が退職や、転勤になってもその学校で ESD の取り組みが続けられる必要がある。そのためにはプログラムの引き継ぎをおこなったり、進歩を報告したり、地域と協力したりすることが大切である。自分が教える時にはちゃんと繋がっていくような提案をしたい。

学校だけにとどまらず、地域の人とも連携して ESD や SDGs の活動を広め、ローカルなところから徐々に広げていってグローバルな目標達成につなげることが大切である。そのためには SDGs について知ってもらう必要がある。だから、説明会を開くなどして、この取り組みに興味を持ってもらい、参加してもらえるようにする必要があると考えた。

（教育学専修１回生　東條　奏子）

第３回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

持続可能な社会の実現のために大切なものは、国際協力と技術革新と新しい制度と多くの市民の参加協力である。SDGs のウエディングケーキモデルでは、教育が全てに通じていると考えられている。ESD では、世代間の公正や世代内の公正を重要視できること、自然環境、生態系の保全を重視できること、人権・文化を尊重すること、幸福感に敏感になり、幸福感を重視することという価値観を育てようとしている。そのためには、利他的活動や自然との交歓や人との交歓が大切である。ESD 教育を通じて CARE できる児童生徒を育てることが重要である。ESD の授業を作るときには、発問がとても重要である。

（教育学専修１回生　東條　奏子）

◆ 自分で考えたこと

私も SDGs のウエディングケーキモデルは、教育が全てに通じていると考える。なぜなら、教育は多くの子どもたちが受けるものでそれによって考え方を学んだり、理解をしたりする。教育によって子どもたちの SDGs に対する関心の度合いも変わるのだ。だから、SDGs について知ってもらうためにも ESD を学校で進める必要があると考える。ESD では、生徒たちへの問いの質がとても重要になってくる。教師は生徒が考えを深められるような発問をする必要がある。そのためには、日頃からさまざまなことに目を向け、深く考えることが大切だと考える。

（教育学専修１回生　東條　奏子）

◆ 自分で考えたこと

人間性を育て、このような価値観を身に付けることが出来るような、利他的活動、自然との交歓、人との交歓が同時に経験できる学校教育として野外活動を挙げられた。私も実際に先月、ユネスコクラブで野外活動の計画や飯合炊飯、調理、キャンプファイヤー、ゲームなどを通して飯盒炊飯の火加減や炊く時間はどうかなど仲間と一緒に楽しく過ごしながら、自然の中で様々な経験が出来、野外活動の魅力に改めて気付いた。まず自分がそのような価値観を持てるように、子ども達と一緒に変わっていけるように意識し行動していくことが必要であると思った。

ESD の授業づくりは、確かな教材解釈と子ども理解が必要と教えていただいた。ESD は課題解決型なので、行動化しやすいような身近なところにある題材を見つけ、単元構想図を作って準備するときに３つの大事な問いを考え、それが互いの意見を交流させるような対話的で、わくわくして楽しくなるような五感を使った体験ができるような活動につながるように考える。そして授業の中で実際に子どもたちが言うだろう発言や考えるだろう思いを想像して吹き出しに書いて準備しておく。先生も子ども達もおもしろいと思えるような題材で子ども主体の授業にしていくことが大切であると分かった。

（家庭科教育専修３回生　中嶌　千智）

第４回奈良 ESD 連続セミナー

◆概要

大和郡山市立片桐西小学校３年生の中澤先生の実践について。大和郡山市で有名な金魚をもとに総合の学習を進めていく。子どもたちは、金魚について既に知っていることに加え、柳町商店街金魚ストリートについて考え、ゲストティーチャーの北谷さんや金魚マイスターの方などに質問して聞いて新しいことを知っていく。そして、実際に自分で金魚を飼ってみたり、金魚ガチャなどを製作したり、またそれを保護者にも発信していくことで実践に繋げていく。

◆ 自分で考えたこと

ESD の教材として生き物を用いることは、私自身、難しく、あまり行わないものであると思いこんでいた。しかし、ほとんどの子どもたちが飼ったことがあり、身近に感じる金魚を用いることで、大和郡山市ならではの視点を上手く活用した授業であると感じた。上手く興味をひきたて、紹介された写真からも子どもたち自ら楽しんで取り組んでいるように見えていて学年の雰囲気を踏まえた学習となっていると思った。その地域の特徴を踏まえた活動をするためには、教師側も沢山勉強して工夫する必要があると分かった。自分も、地元で ESD の教材としてどれが良いのか分からず悩んでいたが、教材の見つけ方としてその地域の広報誌などを見て考えると良いというアドバイスがあったため、実際に実家に帰ったときに見てみたいと思った。

小学３年生という学年に合わせて、他の先生方やゲストティーチャーの方とも上手く打ち合わせすることで、より効果的かつ学びの深い授業はできるということを、理解した。学年や発達状況に応じた授業ができるようにする工夫は、年齢ばかりにとらわれてはいけないが、とても大切なことだと感じた。子どもたちから北谷さんに聞きたい質問の中に、「何歳ですか」というものもあったが、どんな質問でも否定せず黒板に書いてあったため、これは ESD の活動に関わらず小学校の先生として、あるべき姿であると感じた。

授業全体を通し、大和郡山市の象徴でもある金魚を守っていくためには大人たちの頑張りだけではなく自分たちも何かできないかという意識付けを子どもたちに促すことが重要であると感じた。また、学習というだけでなく ESD の基盤として大切になってくる自分の地域を知り好きになるというところまで繋げていくことができる活動だったと思った。在籍年数に関わらず、どのような地域でも自分から発信して授業作りができる先生になっていきたいと感じた。

（家庭科教育専修３回生　上部　遥加）

第７回奈良 ESD 連続セミナー

◆概要

学生の単元構想案の発表

・吉田さん：おいしいお茶の淹れ方（高校）

高校の総合と数学を融合させた実践で、奈良県の大和茶を題材にし、大和茶を美味しく飲むための温度をニュートンの冷却の法則を活用しながら指数関数を学び、さらには、大和茶を広めるにはどうするべきかを考えさせる単元構成であった。

・山平さん：災害から私たちの暮らしを守るには（中学）

中学校地理の実践で、防災・減災をメインとした単元構成。対象地域としては、自分の住む京都市右京区（嵐山周辺）のハザードマップを確認しつつも、ハザードマックが必ずしも信じてはならないという視点を持ってもらえるような単元構成であった。

・栗山さん：主権者としての権利と責任について考えよう～民主的対話と議論を通じて～（中学）

中学校社会の公民分野の実践で、主権者教育を軸としたものであった。多様な価値観や考え方を認め、教員と生徒が共に学んでいくことのできる授業のデザインを考えていた。

◆自分で考えたこと

吉田さんの実践で、数学の計算方法を用いながら、大和茶の適温を計測するという取り組みは非常に面白いなと感じた。しかし、この実践では大和茶の良さを引き出すことができておらず、どの飲み物であっても温度を計測が可能であるため、大和茶を扱う必然性に欠けているように感じた。むしろ、大和茶本来の良さを引き出すのであれば、数学と総合だけでなく、芸術（書道・美術）や家庭科、社会科などと連携をとりながら大和茶を扱うことで、理論的に求められた事実と、芸術などの感性に働きかける授業を融合させれば、大和茶を扱う必然性が見えてくるのではないかと考えた。

山平さんの実践は、地域のことについて学びながら防災・減災を考えるとう視点は面白かった。しかし、調べて、まとめたことをどこに発信していいのかがわからないということを本人も課題として挙げていた。構想案では、地域に発信するとしていたが、桂川沿いに接している地域であるため、下流域と上流域の中学生同士が同じ課題意識を持って学ぶことで、学びが広がり、他地域に住む同世代の価値観にも触れられることができる実践になるのではないかと考えた。

栗山さんの実践は、昨今の若者における政治参加の低下を課題に扱いながら、生徒と共に学ぶ意識を忘れず、互いの自尊心までも高めさせることを目標としながら授業を構成している点が評価できた。しかし、生徒の意見を尊重しすぎるが故の課題もあった。それは、多様な意見を全て、よしとしてしまうことで生徒自身が何を学び取っていいのかがわからなくなってしまうのではないかと考える。そもそも、生徒自身がその中から、課題を見つけて解決できるようになることが重要であるため、教員が多様な意見を踏まえながら課題解決ができるようになる力を身につける道標を作ることが大事であると考えた。

（教職大学院（Ｍ１）　井上　岳海）

第８回奈良 ESD 連続セミナー

◆概要

・単構想案と指導案の検討

◆自分で考えたこと

今回は、自分の単元構想案の検討を行った。自分の作成した単元構想案は中学校社会科歴史的分野の「大王の時代と大陸との交流」という単元で作成した。自分自身の悩みとして、教科書を超えようとはしているものの大きくは超えられていないところがある。なぜそうなるかと考えると、どうしても子供達の入試のことを考えてしまう部分があるからだ。また、自分自身が得意な分野であるからこそ専門的なことばかりを言ってしまいつまらない授業にしてしまうのではないかという不安もある。

しかし、様々な先生方のご教示から自分自身が面白いと思うことを貫いた方が良い、入試のことを考えすぎないことが吉だ、ということを指摘していただき、もっと振り切った単元の展開を考えるべきだったことを反省した。自分自身も大学院に入った頃は、本物に触れることの重要性を言っていたにも関わらず、初心の心を忘れてしまっている部分があった。今回の指摘で、初心を取り戻すことができたような気がする。

また、社会科だけにとどまらず、総合や他教科との関連させながら、単元を構築していくことの重要性を感じたとともに、カリキュラムマネジメントも意識しながら作ることの必要性も感じた。しかし、まずは目の前の単元の構成を改めて考え直したい。

◆ 自分で発展させたいこと

教科書超えと、教えなければならないこととの間の葛藤をどう解決していくかを考えていかなければならないと感じた。実際の現場では、教科書を超えることを否定的にみられる場合もあり、これからもずっと悩み続ける課題なのだろう。しかし、教科書を超えることの重要性も感じているので、上手に両立させながらやっていきたい。

（大学教職院Ｍ１　井上　岳海）

◆ 自分で考えたこと

ESD の授業は今まで紹介されてきたものや聞いたものから、その地域に基づいたものばかりであると思っていた。しかし、「当たり前を、当たり前と捉えない自分になろう」という、絶対的貧困を題材にした授業例を知ったため、他のものと比べると抽象的で身近ではないものも上手く使えれば、より子どもたちにとって良い刺激となる学習ができるということが分かった。発展途上国に対しての支援を考える際に、発展途上国だから先進国である日本に住んでいる我々が、「やってあげる」という考えは適切でない。そのことを、子どもたちに伝えたり、考えさせたりする際、アプローチの方法や声かけに気をつけていく必要があると感じた。また、川の汚れを子どもたち教えることにについて、数値などを測ったり、データで提示したりすることなどしか、思いつかなかったが、今回の相互検討において、綺麗な川に住む魚など、環境に応じた生き物に視点を当てる学習のアプローチがあるという新たな発見ができた。川が一見きれいに見えていても汚れていることが多い。それを子どもたちに観察してもらうことで、子どもたち自身が、想像していなかった事実や現状があることを実感させることができるものは、良いと感

じた。

次に、日本の相対的貧困の問題はプライバシーなどの問題から取り上げるのはとても難しいもので、貧困を題材にした授業をするのであれば、絶対的貧困が良いと思っていた。しかし、子ども食堂の取り組みを紹介するなど、間接的に問題に向き合うような授業行うことができるかもしれない、という新しい考え方を知ることができた。

次に、貧困から調理実習に繋げていくという単元構想案を見て、実際に家庭科の教科書でも消費者としての５つの責任があるということを取り扱っているため、家庭科と教科横断的にやるというのは個人的には学びになる良いものであるのではないかと思った。子ども食堂に欲しいメニューとして鍋が挙げられたことからご飯を食べることはお腹を満たすだけではなく、食卓を囲む楽しさが大切だというお話を聞き、私も共感した。最近、子どもたちのプライバシーの問題から、教師がやりたいと思う学習をする際にも、十分に考えてできるかできないかを検討し、慎重に行わなければならなくなっている。教師がやりたいこと、伝えたいことを全てやるということは難しいのだなと実感した。しかし、視点やアプローチの方向を少し変えてみるだけで解決できることもあると知り、様々な視点から教師が伝えたいこと、子どもたちに考えてほしいことを実践できるような授業を作っていきたい。

（家庭科教育専修３回生　上部　遥加）

第９回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

学習指導案の相互検討②

１「おそろしい火事からくらしを守ろう」（小学校３年生社会科）

２「地域の空き家＆店舗の利用価値の創造」（高校１年生総合的な探究の時間）

３「わたしたちのまち～安房地域の秘密を探り、守ろう～」（小学校３年生総合的な学習の時間）

◆ 自分で考えたこと

今回の指導案の相互検討で二つの事を考えた。一つ目は、内容の具体化である。例えば、ポスターを地域の人に発信するという活動の際、発信する対象が子どもたちなのか、高齢者なのかによって内容が大きく異なる。また、なにかを考察する際にも、着眼点によってアプローチがことなる。抽象的で自由な発想を求める活動と具体的に設定された条件の中で考えていく活動を使い分ける必要があるのではないかと考える。

二つ目は、魅力などのプラス面と課題などのマイナス面のバランスである。例えば、地域の現状を取り上げて単元をつくる際、課題に焦点を当てすぎると「自分の住んでいるところはあまりいい所ではないのかな」という思いを植え付けかねない。魅力と課題点双方を踏まえたうえで地域について考える必要があると思う。

（社会科教育専修３回生　山平　楓）

◆自分で考えたこと

竹を使い、灯籠のようなものとして再利用するだけではなく使わなくなったら燃料として利用するというように再利用のその先まで考えられていると思った。木材の授業をしてから内を利用した授業を行うことで他の先生もおっしゃっていたが、木材よりも曲げるなとの加工がやりやすいことや、加工のしやすさから昔から籠が使用されているというように竹の良さや現代の以外にも視野を広げることができると考えた。

平和学習の検討では、総合的な探究の時間として行ったことにより、中学生でも戦争など身近なものに感じにくい内容を、自分事化して捉えやすくなっていると思った。

１クラス８人という少なさも上手く活かして少人数だからこその授業ができていると感じた。道の駅や特に川の良さなど、小学校３年生だからこそ見えてくる視点を大切にし、子どもたちの発言したい、やりたいことを自由にやらせることで、子どもたちにとっても心に残る授業になったのではないかと感じた。

（家庭科教育専修３回生　上部　遥加）

第10回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

学生が作成した学習指導案の報告・検討

①中学校社会科「自然災害からわたしたちの暮らしを守るには」

②小学校生活科「たのしいあきいっぱい」

③中学校社会科「近現代の日本と世界ー開国と近代日本の歩みー」

◆ 自分で考えたこと

指導案を検討している中で、防災に関する単元が総合的な学習の時間を中心としたものなのか、社会科を中心としたものなのか曖昧であるという指摘をいただいた。防災・減災の単元を、社会科を中心にして展開するには、地図資料の読み取りや地域調査の手法を学習すること、日本の特色のひとつである「自然災害」について学習することなどが挙げられると考える。

また、他の方の指導案を検討した際、「子どもたちが感じた思い」を大切にすることの重要性を実感した。生活科では五感を使って秋のよさを感じ、それを遊びに落とし込んでいっていた。中学校の社会科では、学習を通した感想や心の中の変化などを表現する場としてプレゼンテーションを設定されていた。様々な体験をする中で、子どもたちの心や意識の変容をなんらかの形で表すことができる機会を設けることが大切だと考える。

（社会科教育専修３回生　山平　楓）

◆自分で考えたこと

指導案の相互検討でご指摘いただいたことやそこから気付いたことは、自分の指導案の修正すべき点として軸がぶれてしまっていたことと題材観と指導観の浅さであった。軸は一番伝えたいことであるが、そこに詰め込みすぎていたり、具体的に子どもたちに何を考えてほしいか焦点がぶれてしまったりしたので取捨選択が大事だということだった。

題材には様々な側面があり、保存に至る背景や題材の現在の活用、その題材の特性についてなど、どの側面を中心に焦点をあてるのか定めて構成していくことが重要だと感じた。題材にさまざまな魅力があり児童に伝えたいことがたくさんあるからとそれらを盛り込みすぎると、何に気付いてほしいのか味になり教師のねらいや題材の持つ良さから離れてしまう。最も児童に理解してほしい、考えてほしいことから離れすぎないこと、それ以外で伝えたい情報は適した場面で補助的に示すように取り入れていくとよいのだろうかと思った。

題材観と指導観については、教材研究が浅く具体的でないと指摘をいただいた。保存活動に携わった人々の話を伺うにしても、どのような良さを語ってほしいのか、そこから児童にどんな人々のどんな思いを感じさせたいのか、さらにどんなことを考えさせたいのかなど更に具体的にするとより深い指導になる。また、保存活動の事実や想いなど背景をより深めることで、子どもたちの行動にも具体的につながることが分かった。

先生方から私が知らなかったことや多方面の視点からのご助言をいただけたので、自分の知識や関心の引き出しをたくさんもっていることが重要だと改めて感じた。そして題材について知らないことが多いのは当然だがどの方面からどのようにアプローチしていくかといった視点を広く複数持ち、さらにそこから児童生徒がどのように広げていけるか考えなければ深めることが難しいと思った。

（家庭科教育専修３回生　中嶌　千智）

◆ 自分で考えたこと

中嶌さんの指導案の相互検討では、JR 奈良駅の旧駅舎について考えるだけではなく、実際に子どもたちの身近なものに最後落としてより考えやすく実感しやすく、生まれ育った地を大切にしたいという気持ちが生まれそうな授業だと感じた。

私の指導案の相互検討では、先生方の持っている知識などをもとに、「こうしたらもっと面白い授業ができるのではないか」「理想的な授業を考えることができるのではないか」などたくさんのアドバイスをもらうことができ、私自身も一緒に話し合い、考える時間はとても楽しくよりよい活動ができた。また、歴史的な面を入れるかどうかで行き詰まっていた点も上手く入れるにはどうしたら良いかのアドバイスもたくさん聞くことができ、勉強になった。また、海がない奈良県で働いている先生方から海の近くだからこそできる私のアマモを使った授業は是非やってほしいと言っていただいた。教師になった際には実践してみたいとより一層感じた。また、ほとんどの先生方が二見へ訪れたことがあるからこそのアドバイスもたくさん聞くことができ、私からは見えなかった視点もたくさん教えて頂けたため新しい気付きや学びをすることができた。「アマモが食べれるのか」と実際に児童から聞かれる予想はできるが、私自身が分かっていなかったとしても、子どもたちと一緒に分からなかったことについても考え、気付くきっかけとなると、とても勉強になった。

（家庭科教育専修３回生　上部　遥加）

◆自分で考えたこと

私は、今までの指導案作りで何度も導入部分について指摘をいただき、改善はしてきたもののしつくりはきていなかった。しかし、今回の相互検討で、放生会の記事を最初に持ってこればいいのではという意見をいただき、今までの中で一番しっくりきたように感じた。考えてみると、最初の単元構想案をつくっているときに、授業の中で中心にして考えたいなと思っていた内容であり、奈良での出来事なために身近に感じやすい教材であることに気づいた。良い教材だからこそ、導入ではなく中盤の児童に考えさせるときに使用しようと考えていたが、最初に大きな問いにぶつかることで、外来種がいるからではなく行事を守りたいからという人々の思いや願いについて考えようという児童たちの姿勢が期待できるのではないかと考える。また、ディベート後にも考えさせるのではなく、ディベートまでの準備期間を大切にすることで解決できないもどかしさや、片方のことだけを考えてはいけないという経験を取り入れた方がより発展的な学習になるのではないかということに気が付けた。多くの人に見てもらうことで、新しい視点を得ることができた。

（教育学専修３回生　大西　遥郁）

奈良女子高校フィールドワーク

◆概要

奈良女子高等学校で実践されている減災教育「私たちが古都の命をまもるなら」のフィールドワークに同伴した。生徒が設定した守りたいものには、家族・友人・子ども・観光客・動物などがあげられ、またそれぞれを守るためにできることを動画や SNS など様々な方法で発言し伝えることを目指している。守りたいものそれぞれ班に分かれてならまちを散策した。

◆ 自分で考えたこと

高校生が気付きを得ることができるために、視点を変えたり深く考えたりできるようにするためにはどのように声をかけるか難しく感じた。災害時と大まかに考えていたので、何の災害を想定しているのかを尋ねた。そこから質問を繰り返し地震の場合は倒壊や倒木、二次被害やライフラインなど、台風の場合は強風や大雨による洪水で危険だと考えられる場所はどのようなものかを探すよう目を向けさせた。地震か台風かなど具体的に設定して考え街を見てみると見えてくるものがちがってくるということを実感してもらえたと思う。また目を向けさせるためには私自身がどのような危険性があるのかを知っておくこと、またそれらを身の回りで見つけられる視点がないといけないと感じた。

食料について、高校生はまず柿の葉寿司に着目していたが、私は、用いている柿の葉寿司を災害時に食べるということを考えたことがなかったので驚きだった。柿の葉寿司の発祥の背景を見ると保存がきくため活用できるかもしれないと気付くことができた。

能登半島地震のニュースから災害時は自動販売機を開け商品を取り出すことができるということを知ったので、そのことを生徒に伝えた。自動販売機の活用から、飲料水の確保だけではなくお汁粉は小豆が使用されていたり砂糖の含有量が多かったりすることから災害時不足してしまう栄養の確保にもまかるのではないか、被災時の食料には何が求められるのかなどに広げられていた。その他にも、インスタントラーメンは湯がなくても水でもどしてたべることもできるということや、私が授業で学んだエコクッキングの方法についても伝えた。学生はどれも知らなかったらしくとても興味を持って聞いており、今回の活動でどのように活かせるか考えていた。知識があると自分を守るだけでなく伝えて他の人に役立て助けることができる。さまざまなことに興味を持ち知ろうとする姿勢が重要だと実感した。

（家庭科教育専修３回生　中嶌　千智）

近畿 ESD コンソーシアム総会

◆ 概要

「奈良教育大学 ESD・SDG s センターとコンソーシアムの今後の展望」

【加藤先生のお話】

ESD は新しい教育を生み出すものである。また、コンソーシアムは奈良教育大学の ESD を形成した基盤といえる。ESD は、マルチステークホルダーが重視される。学外との連携が必要であり、それは真の大学そのものの在り方を目指すものであるといえる。日本は国連の加入前に国民に国連の認識に努めたり、ユネスコに加盟前にユネスコ運動のチラシで意識をもたせたりと、活動が加盟へとつながっている。このように、奈良教育大学でも、ユネスコスクールになる前に、ユネスコが提起する教育をどう受け取るか、ということを考えており、ユネスコスクール加入があくまでも通貨点となっている。そのような姿勢が大切である。

【中澤先生のお話】

ユネスコクラブの ESD 活動について防災、野外活動支援、春日山原始林フィールドワーク、東大寺寺子屋、ESD セミナー、実践勉強会、認定式などを行っている。子どもたちにとって ESD は、多様な人と関わりながら、学んでいくものである。

SDG s の達成には、能動的に参加できる市民を増やすボトムアップが必要である。そのため、教員は大きな力をもち、ESD はとても重要である。

今後の展望について

・奈良 SDG s 学び旅

修学旅行生に、人と鹿の共生、東大寺の 1300 年の歴史などを学習できるフィールドワークをつくる。

・ニーズ調査

コンソーシアムが全国へと拡大し、より重層な活動になるよう努める。

◆ 自分で考えたこと

話を聞いて、自分のこれまでの活動について振り返ることが出来た。

ユネスコクラブに入ってから二カ月。積極的に ESD の活動に参加してきた。ESD 連続セミナー、春日山原始林フィールドワーク、野外活動支援、そして今回。どれも新鮮な経験ばかりで、学びがたくさんあった。学校の授業もある中、様々な活動も並行して行い、大変ではあるものの楽しく毎日過ごしていることに改めて気づいた。また、以前母からも生き生きしている、と言われたことがあり、中澤先生の ESD に取り組む教員は元気である、という言葉にとても納得できる。まだまだ活動数は少ないが、様々な活動を通して、ますます自分の視野が広がっているように感じている。

今後も積極的に ESD の活動に参加していきたい。そして、通過点として、ESD ティーチャーを取得できるように今後も取り組んでいきたい。

◆ 自分で発展させたいこと

今後自分が ESD の活動に参加する際に、どのような姿勢で取り組むべきかを見直したい。

ESD の目標として、ESD の授業づくりができる、という点がある。活動に夢中で手一杯になってしまっては勿体ない。集中して活動に専念していることは良い点であるといえるが、今後の目標を考えたうえで、今日の活動で学びたいこと、目標を自分で計画して取り組むことで、より経験に深みが出ると感じた。活動に参加するだけではなく、どのように参加するか、という点も今後意識していきたい。

（特別支援教育専修１回生　長尾　希颯）

Youth Participation in ESD in Japan: Practices of UNESCO Club, Nara University of Education

Agenda

01 What is UNESCO Club at NUE

About us

02 Project on Education for Traditional Culture

03 Project on Disaster Risk Reduction(DRR) Education

04 Conclusion and Way Forward

International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

01 What is UNESCO Club at NUE

objects

to enjoy learning ESD

to train ourselves to be a good teacher who can implement ESD effectively

International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

01 What is UNESCO Club at NUE

Enjoy activities

Act on our own

Learn ESD

to enjoy learning ESD

to train ourselves to be a good teacher who can implement ESD successfully

More than 100members

Practice ESD

Act with children

Challenge

International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

Learn ESD - ESD Hiking

・Visit cultural and other heritage sites in Nara

・To learn things that can only be experienced by actually seeing and experiencing them.

Deepen understanding of ESD

Development of ESD teaching materials

International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

Agenda

01 What is UNESCO Club at NUE

About us

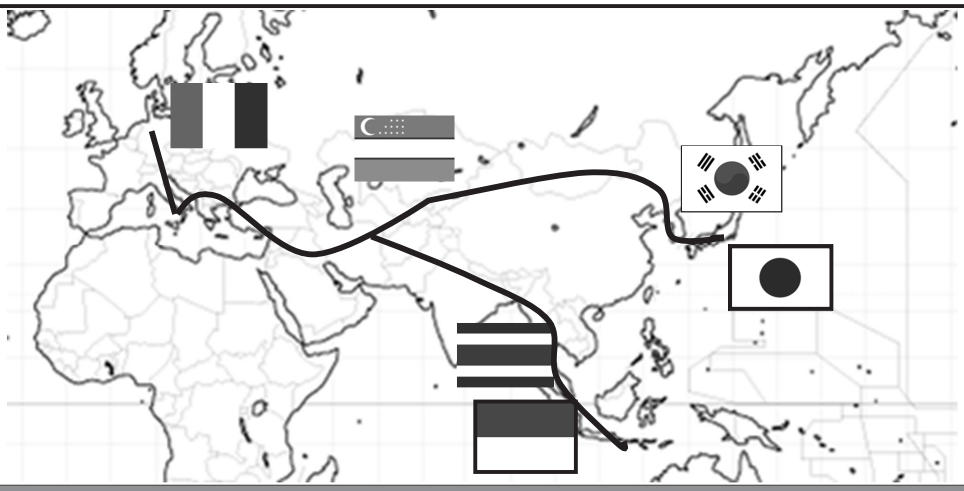
02 Project on Education for Traditional Culture

03 Project on Disaster Risk Reduction(DRR)Education

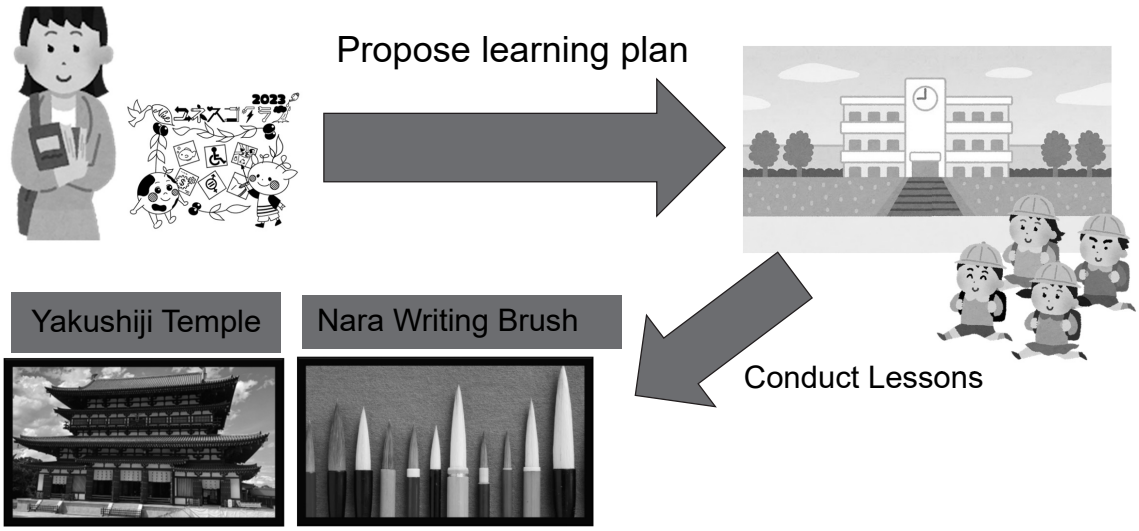
04 Conclusion and Way Forward

International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

02 Project on Education for Traditional Culture



International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024



International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

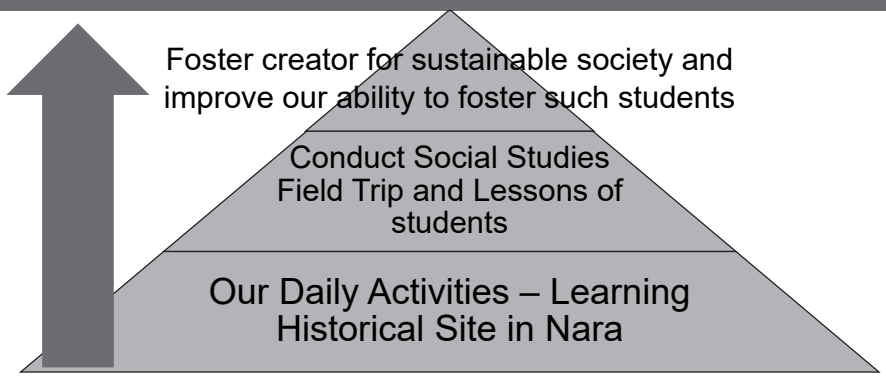
02 Project on Education for Traditional Culture

A Preliminary Lesson	Social Studies Field Trip	Follow-up Lessons
Learn about Nara Writing Brush and Yakushiji Temple in classroom	①Experience Nara Writing brush-making workshop. ②Visit Yakushiji Temple.	Make a presentation on what pupils learn.
Cognitive Skills	Social and Emotional Learning	Behavior Competences

International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

02 Project on Education for Traditional Culture

Summary of This Project



International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

Agenda

01 What is UNESCO Club at NUE

About us

02 Project on Education for Traditional Culture

03 Project on Disaster Risk Reduction(DRR) Education

04 Conclusion and Way Forward

International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

03 Project on DRR Education

The importance of ESD relating to DRR
Our activity for Disaster Reduction Education

- Relationship between ESD and DRR
- Activity for DRR Education of UNESCO club
- The importance of DRR Education in Japan

International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

03 Project on DRR Education

Relationship between ESD and DRR

Disaster Risk Reduction

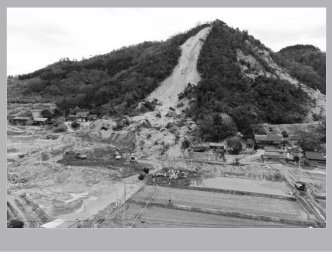
Activity for disaster prevention of UNESCO club

The importance of DRR education in Japan

International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

03 Project on DRR Education

The importance of DRR Education in Japan



Relationship between ESD and DRR

Activity for disaster prevention of UNESCO club

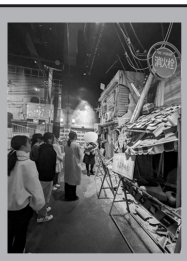
International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

03 Project on DRR Education

Activity for DRR Education of UNESCO club

We have implemented disaster prevention for 5 years.

We have put much emphasize on **practical dimension.**



Relationship between ESD and DRR

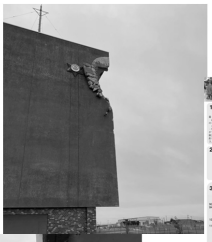
The importance of DRR Education in Japan

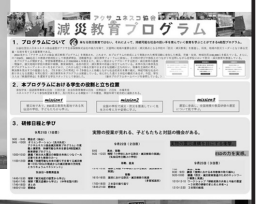
International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

03 Project on DRR Education

Participation in DRR Education Program (2023, Sep)

Rising Disaster Awareness and sensitivity by visiting schools, earthquake movable remains and talk with teachers who conduct DRR





Theoretical dimension

- how to conduct ESD relating to disaster reduction
- the importance of ESD

International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

03 Project on DRR Education

Collaboration with Nara Women' High School – DRR Education

messenger

①Inform what we learn to students
→The fear of natural disaster

facilitator

②Elicit and deepen students' opinions in classes
→Improve the Quality of Classes

International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

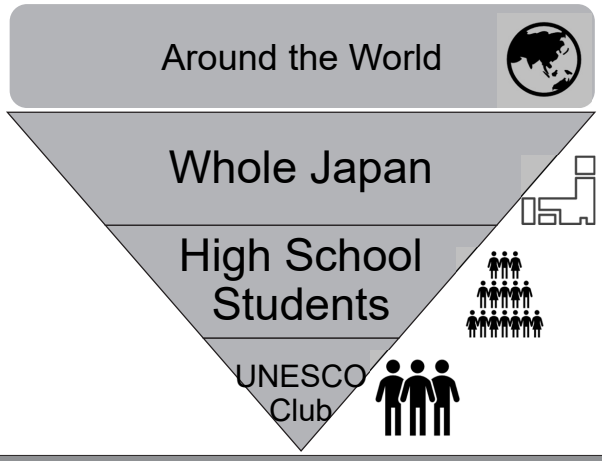
03 Project on DRR Education

We introduced our activity with Nara Women' High School at National Level

- Spread what we learn to the community
- Spread what we learn to other colleges and universities
- Spread what we learn to the world

International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

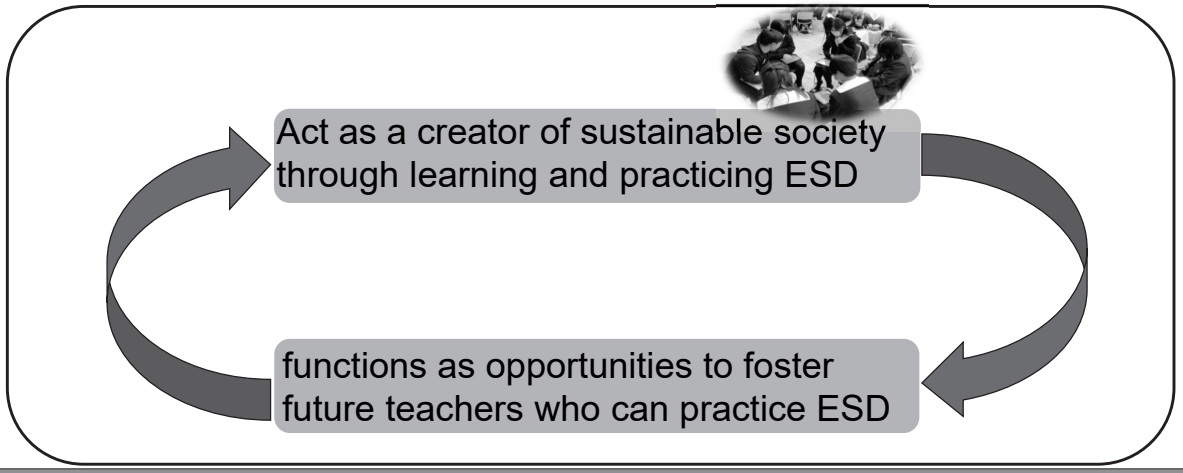
03 Project on DRR Education



Improving quality of DRR education

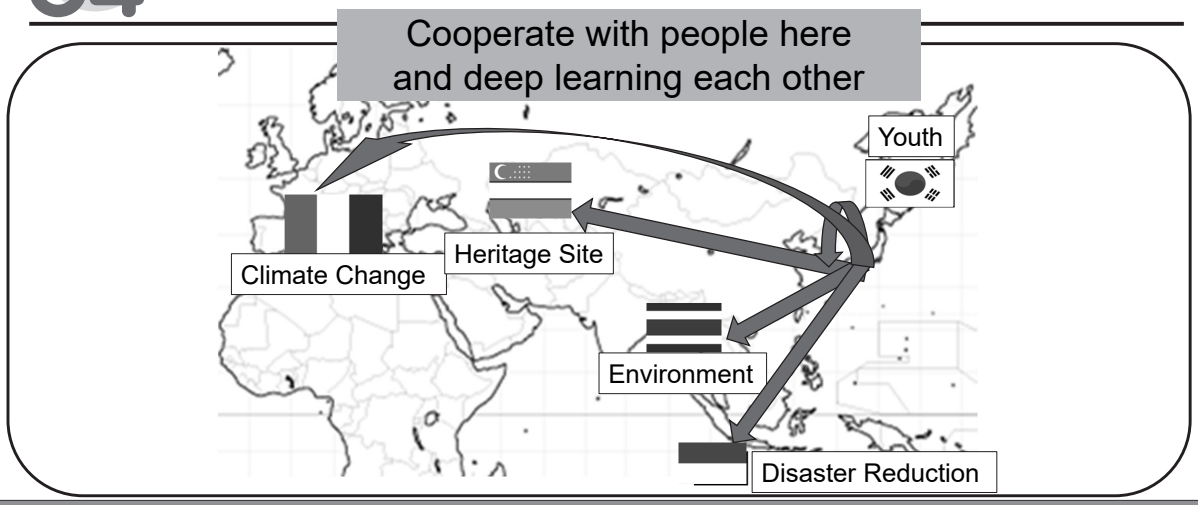
International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

04 Conclusion and Way Forward



International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

04 Conclusion and Way Forward



International Symposium on Education for Sustainable Development in Nara 2024

Thank you

一年間を振り返って

この１年は、奈良教育大学の ESD 事業がとても積極的に行われ、例年以上の活動数でありました。年々活動の幅が広がってきています。様々な場所で活動できる機会をいただけるということはとても喜ばしいことです。

また、コロナ前の状況に戻り制限もなく活動できています。このような環境に感謝し、これからも ESD 事業を推進していきたいと思います。

私自身、この１年は主に野外活動支援に携わらせて頂きました。この１年で ESD に関する知識や意欲も高まりました。これからはより様々な種類の活動に参加していきたいと思います。そして、全体として多様な取り組みを進め、それらに参加しやすく、挑戦できる環境にしていきたいと考えています。

（英語教育専修１回生　田中　天央衣）

次年度に向けて

次年度に向けて、より一層 ESD についての情報を発信し、ESD に対する取り組みを行っていきたいと考えています。今年度、様々な団体と連携しながら活動を行ったり、その活動内容を発信したりしてきました。しかし、まだ ESD の認知度は低く、私たち自身もまだまだできることがあると思っています。今後は、セミナーにも積極的に参加し、より多くの方と関わり、新しい取り組みにも挑戦していきたいです。そして、学びを将来へ活かしていきたいと考えています。

（英語教育専修２回生　澤井咲樹）

編集委員より

今年度、ポートフォリオには数多く報告がありましたが、中澤静男先生を中心に以下の３名の学生編集委員で掲載分を選出していきました。

国語教育専修２回生　吉岡優来
英語教育専修２回生　澤井咲樹
英語教育専修１回生　田中天央衣

この報告書に掲載されている以外の報告も沢山の掲載がありました。ポートフォリオを編集していると１年間の ESD 演習・実践の活動での学びの深さがうかがえ、奈良教育大学の ESD・SDG s 活動の大切さを実感することが出来ました。また、今後、自分自身としても今回の編集委員で沢山の報告書を閲覧し学びも得ることができました。それらを活かし、ESD・SDGs 活動に精進していきたいと思います。

（国語教育専修２回生　吉岡優来）

令和５年度　奈良教育大学 ESD 学生活動報告書

令和 6 年 3 月 31 日

国立大学法人奈良国立大学機構奈良教育大学
ESD・SDGs センター
〒630-8528　奈良市高畑町
TEL 0742-27-9367・FAX 0742-27-9147（教育研究支援課）